庭石と地質

庭園文化研究分科会　　片山　直樹

１．はじめに

庭園文化研究分科会は、県内各地の日本庭園を訪ね、島根における庭園の魅力や作庭技術などに触れるとともに､地域資源としての活用や保全について考えていくことを大きな目的とし、今年度より活動を開始した。活動初年度である今年度においては、県東部に多くみられる「出雲流庭園」を６箇所見学し、出雲流庭園についての特徴などについて考察を行うことが主といえる。

さて、私にとって日本庭園は、以前から「何となく落ち着く、気が休まる」場所として気に入っており、寺院などの観光の際には庭を拝観させてもらっていた。ただ、庭の見方、いわゆる「見立て」については全くの無知であり、最近ではより深く庭を知るためにも勉強せねばと考えていたところ、本研究分科会の存在を知り、参加させていただいた次第である。

以下では、本研究分科会に参加し、私なりに日本庭園について学んだことを整理するとともに、庭の骨格を成すといっても過言ではない「庭石」について、その見立て方や、地質的な切り口からの考察を述べる。

２．日本庭園の形態

日本庭園は、歴史的に見て、一貫して石・水・植物などの自然の素材を用いて、大地の上に自然の風景を創出したものが多い。そして、時代の移り変わりによって、そのトレンドも大きく異なってきている。

一般的な日本庭園の形態としては、「池泉庭園」、「枯山水」、「露地（茶庭）」の３つに大別される。池泉庭園や枯山水では、池や枯池を大海と見立て、そこに浮かぶ島々をつくり、築石や石組で丘陵や山、急峻な山岳を表現した。これらはいずれも、大自然の美しい景観を縮めて表わそうとしている。

これに対して露地は、樹木や、コケなどの地被類を多用して、身近にある山間の風情を表現している。同時に建物も質素な外観にすることで、山居の佇まいを表わした。

このように、自然を尊重する点は同じでも、景色の捉え方にはそれぞれ違いがある。この幅広い表現によって、三つの形態が今日まで併存してきたといえる。以下に、これら３つの形態の庭園について、概要を述べる。

（１）池泉庭園

貴族や大名などが邸宅内に好んで設けた優美な庭園。広大な土地に池や山を築き、時には舟を浮かべて楽しんだ。時代によって作庭様式が異なり、寝殿造庭園（平安中期)、浄土式庭園（平安末期)、書院造庭園（鎌倉･室町）などに細別される。

（２）枯山水

日本に禅の思想が根付くとともに発達した庭園。あえて厳しい自然をモチーフとし、水を使わず砂や石で滝や急流などを表現する。水を使わずして水を感じることは悟りの世界観でもあるといえる。

（３）露地

茶人の発案による庭園で、茶事のもてなしの一つとして、庭の設えや意匠を楽しむ。市中の山居とするために、従来の建物や庭園とは異なる質素で侘びた風情を持たせた。

３．庭石の見立て

昔は石を立てる（据える）ことが、すなわち庭をつくることを意味した。つまり、「石を立てる」ことは庭造りの基本といえ、庭石は庭の骨格を成すといえる。

様々な石を組合わせて、鶴や亀などに見立て、神仙蓬莱（しんせんほうらい）の世界観を創出することもあった。また、石橋は単なる風景としてではなく、理想の世界に渡る思想を込めた形で架けられることもあった。

想いや願いを、様々な形で配置し、風景に違和感無く溶け込ませることこそ、庭石の表現である。何を表現しているのかが一目瞭然のものもあれば、抽象的で判別困難なものもあり、そこが庭を奥深いものとしている。

今回視察した鰐淵寺庭園では、住職から「庭の見立ては人それぞれであっていい。むしろ固定的なものでない方がいい」との旨のお話を頂いたが、その話を聞いて、庭の知識が少ない私個人としては少し気が楽になった。

ただ、作庭者の庭に込めた想いを推し量り、より深く庭を楽しむためには、やはりある程度の基礎知識は必要と思われる。しかし、その一般的な知識を庭に押し付けるのではなく、それぞれの庭や、また、季節の変遷から感じられる趣の違いなどから、庭の見立ては自ずと違うものになると思う。庭を五感で感じ、自分なりに見立て、作庭者の想いを馳せる部分に、庭を鑑賞する面白さがあるのではないかと思う。

以下では、代表的な庭石の見立てを、私が実際に行った庭園での例を交えて紹介する。

（１）神仙蓬莱思想の石組（いわぐみ）

日本で最も多い石組の思想は、神仙蓬莱思想である。古代中国の秦の始皇帝や漢の武帝の頃、海のかなたに仙人が住む島（＝神仙島）があり、そこには不老不死の仙薬があるという説が信じられた。これを神仙蓬莱思想という。池泉に神仙島をつくることにより、自らの不老不死や長寿を願ったのである。

以下に、神仙蓬莱思想における代表的な石組についてまとめる。

①．神仙島

主に池泉に据えられた石組によって、伝説上の神仙島と見立てる場合が多い。神仙島は、蓬莱（ほうらい）、方丈（ほうじょう）、瀛州（えいじゅう）、壺梁（こりょう）などの島があり、これらの島々を石組によって表現している。

例えば、高松の栗林公園には、広大な池泉にポツンと据えられた３つの石組によって神仙島が表現されて

写真-1. 栗林公園で見られた神仙島（飛来峰より南湖を望む）

いた（写真-1）。

栗林公園の庭園は、紫雲山を借景に山の東に広がる広大な庭園であり、庭園は南北に大きく 2 分することができる。南側には 2 つの池泉－北湖と南湖があり、特に南湖の飛来峰からの眺めは雄大である。写真-1 に点線で囲った部分に神仙島が見られる。

写真-2. 鹿苑寺鏡湖池に見られる鶴島と亀島

②. 鶴島と亀島

神仙島とともに多くみられる石組に、鶴島と亀島がある。神仙蓬莱思想は不老不死の世界であるため、「鶴は千年亀は万年」の例え通り、長寿の象徴として表現されたものと考えられている。これらは石組だけの表現と、島にしたものの 2 通りがあるが、その判別は言われてみなければ判らないような難しいものが多いように思う。

実際に、鶴島と亀島があることで有名な京都の鹿苑寺（金閣寺）庭園の池泉を見たが、なかなか素人に判別できるような意匠ではないと感じた（写真-2 点線囲み）。

③. 舟石（ふないし）

蓬莱島へ行く舟を現した、まさに舟形の石で、室町時代以降に現れたとされる。伝説では、蓬莱島に辿り着くことができれば、不老不死の秘薬や財宝が手に入るという。

舟石は面白いことに、旅立ちを表わす「出舟」と、成功して帰ってきた「入舟」の 2 種類ある。出舟とは、まさに蓬莱島へ向かう旅立ちを示しており、舟石自体の根入れが浅く、舟の喫水線が高く据えられたものである。

一方入船とは、蓬莱島から宝物を満載にして帰ってきた様を表わしており、舟石の根入れが深く、舟の喫水線が低くなっているものである。

この舟石にはまだ出会っていない（ひょっとしたら出会っているが、気付いていないだけかもしれない）ので、今後庭園を鑑賞するときには注意したい石組の一つである。

（２）仏教思想の石組

神仙蓬莱思想とともに、日本庭園に大きく影響しているのが仏教思想である。浄土式庭園がその典型であり、極楽浄土へ行きたいという想いから、庭園に仏教思想を表わす意匠を取り入れたものである。

以下に、仏教思想における代表的な石組についてまとめる。

①. 須弥山（しゅみせん）（九山八海（くせんはっかい））

須弥山は、古代インド人が想像した、世界の中心にある山である。それはヒマラヤ山脈の後方にあり、標高は諸説あるが、エベレストの 200 万倍以上と想像を絶するものである。須弥山の周りには 8 つの海と 8 つの山があり、これら全体を「九山八海」という。現在では、チベット西南のカイラス山が須弥山と見立てられている。

須弥山石組の歴史は古く、「日本書紀」に推古 20 年（612 年）には日本庭園に取り入れられたとあり、大陸から庭園文化が伝来すると同時に、須弥山のイメージも日本に伝わったとされる。

益田の萬福寺庭園は、典型的な九山八海を表わした須弥山石組があることで有名である。小高い築山の頂上に立てられた石は須弥山を表わし、その周囲の石組は九山八海を表現している。

写真-3. 萬福寺庭園に見られる須弥山石組

②. 三尊石

日本庭園における石組の基本パターンともいえるもので、ちょうど仏像の三尊仏のように中央に大きな石を、その左右にやや小ぶりな石を組んだもの。平安時代の庭造りの書物「作庭記」にも記されており、かなり早い時期からこの基本形が確立し、広く使われていたといえる。

この三尊石は、釈迦三尊や阿弥陀三尊などを表わすこともあるが、多くの場合は庭の景観を造るために用いられる。時代によって、その組み方が微妙に違うことから、時代判別の材料となる。

③. 龍門瀑（滝石組）

龍門瀑は、黄河中流の 3 段の滝を鯉が上りきって龍と化すという、登龍門の故事を造形した滝の様式である。その多くは 3 段の滝のように石が組まれており、ダイナミックな滝を表現している。

滝の周りには様々な意味を持つ石が置かれることが多く、水が落ちる様を表わした「水落石」、観世音菩薩を表わした「観音石」、滝を上る鯉を表わした「鯉魚石」などが組まれる。

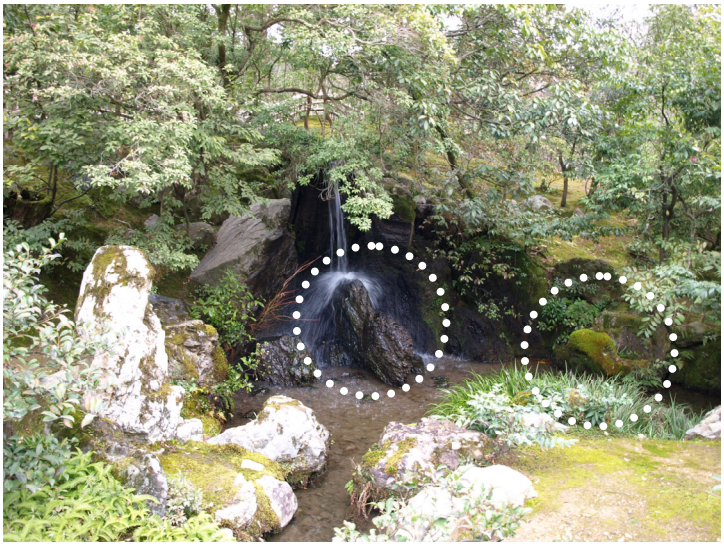

写真-4. 鹿苑寺庭園に見られる龍門瀑

枯山水庭園などで、実際には水を落とさない滝石組を「枯滝石組」という。なお、元は水が流れていたが、涸れてしまったものは「涸滝石組」といい、京都の天龍寺庭園などが代表的である。

写真-4 に示す鹿苑寺庭園の龍門瀑は、天龍寺の滝を参考としているとされる。正面の水落石は、それ一枚で三級岩（3 段の滝）を象徴している。水落石の上端がやや窪んでいるのも、天龍寺を倣っているためとされる。そして、この龍門瀑の見どころは、滝直下にある鯉魚石であ

る。鯉はやや左に傾きながら、いかにも水中から跳躍し、滝を上り越えようとしている様を力強く表わしている。石の選択、組み方で、訴えかける印象が大きく異なるであろうことがわかる好例であるといえる。

なお、滝直下の鯉魚石の右後方にも苔むした伏石があるが、これも鯉魚石とされ、鯉 2 匹が遡上している様を表わしており、このような例は多くないとされる。

４．庭石と地質

以上のように、庭石は作庭者の思想が込められた重要なアイテムであるため、その“顔つき”を表わすこととなる岩相－すなわち地質と深く関わっている。

図-1 に一般的な庭石の産地と大まかな地質分類を示し、以下に各分類について述べる。

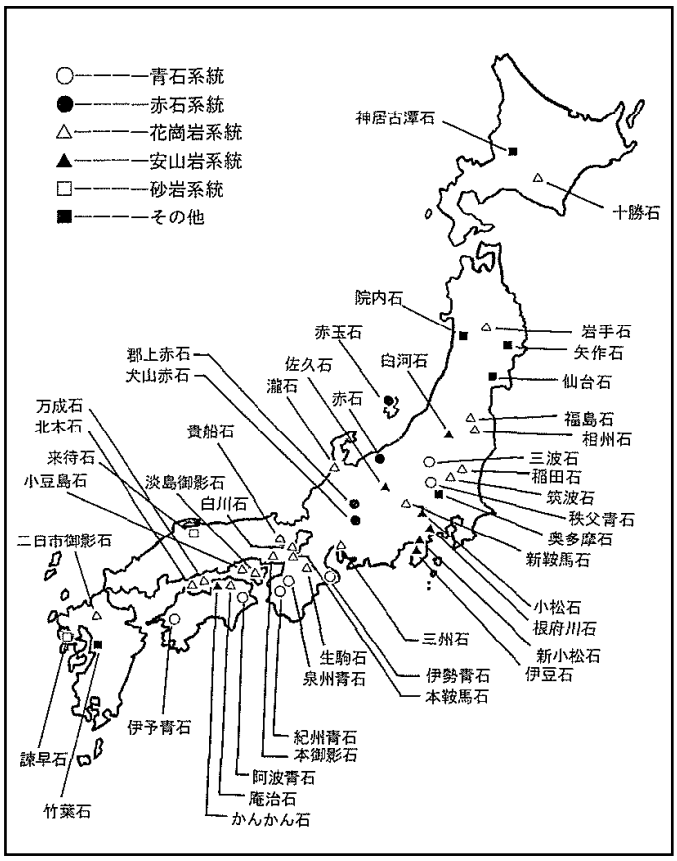

図-1. 一般的な庭石の産地と大まかな地質分類
（出典：龍居庭園研究所編「石組作法」p.64）

（１）青石

庭石に用いる青石とは、一般に変成岩である結晶片岩（主に緑泥片岩）のことを指す。かつては青石でなければ庭石にあらずと言われるぐらい脚光を浴びた石である。

青石の中で最優良とされているのは伊予青石である。その理由としては、他と比べ冴えた青緑色であり、経年退色せず、硬度や石理に優れている点などが挙げられる。

結晶片岩は、低温高圧型変成帯に出現するため、三波川変成帯や領家変成帯の低変成度部に主に産する。

（２）赤石（赤玉石）

赤玉石といえば、佐渡の赤玉石が有名であり、庭石としては最高級品とも言われている。地質はチャートである。チャートは二酸化ケイ素（SiO_2）を主成分とする放散虫や海綿動物などの遺骸が海底に堆積し、固結した堆積岩である。硬度が非常に硬く、無水酸化鉄を含むため赤色を帯び、光沢のある岩質である。近年は産出量が極めて少なく、貴重な石となっている。

（３）花崗岩

花崗岩は、御影石などに代表される深成岩。酸性岩であり色調は白色～淡褐色を呈し、少量の有色鉱物を含む。構成鉱物は粗粒で、その組織には方向性が無く等方的な力学挙動を示す。

我が国では、花崗岩は豊富に産出するため、庭石としても広く用いられている。その中でも、

神戸市御影地方に産する本御影は、錆がついた様な褐色を帯び、他の花崗岩と比べ硬度、色味、雅致に秀でており、風化しても渋みのある趣を醸し出すため、珍重されている。

（４）安山岩

安山岩は、マグマが浅所で冷え固まった火山岩であり、花崗岩と比べ構成鉱物が細粒でガラス質な組織を持つ。色調は灰色、淡紫色、青灰色、褐色など多岐にわたる。関東地方では最も産出量が多く、小松石、根府川石、伊豆石などが有名であり、江戸城築城時にも大量に使用されている。

（５）砂岩・凝灰岩

その名の通り、砂岩は砂が、凝灰岩は火山灰が固結した堆積岩である。砂岩の庭石としては、島根県宍道に産する来待石が有名であり、加工のしやすさから石灯篭（出雲灯篭）にもよく利用されている。

また、凝灰岩としては栃木県宇都宮に産する大谷石が代表的であるが、土木建築用石材として利用される場合が多い。そのほか、京都の貴船石がその硬度の高さや美しい色調のため、庭石として高級品とされている。

５．京都の庭石変遷と出雲流庭園

今回、本研究分科会で見学した出雲流庭園の庭石の地質は、花崗岩がほとんどであったように思う。しかし、京都の伝統的な庭園に用いられる庭石の地質としては、主にチャートが好んで用いられている（図-2）。

これは、京都盆地でチャートが産するという地域性が強く影響しているものと考えられるが、時代が下ってくると結晶片岩や花崗岩が台頭してくるようになる。

このうち京都の庭園における花崗岩のデビューは桃山時代であり、古田織部や小堀遠州ら茶人たちが花崗岩の無表情さを高く評価し、「露地」の飛石などに採用し始め、江戸時代以降、庭石として広く利用されるようになった歴史を持つ。そして花崗岩は加工性が優れていたため、日本庭園ではそれまで自然石が当然とされていた石橋では切石を使った橋が出現するなど、意匠上の大きな変革をもたらした事実がある。

今回訪問した鰐淵寺を除く出雲流庭園は、いずれも花崗岩主体の庭石を用い、かつ、庭の形態としては「露地」に近い印象を私は持った。また、短冊石と呼ばれる花崗岩の切石による飛石も全ての庭園で認められた。上述の京都における庭石の変遷を考慮すると、出雲流庭園は江戸時代以降に、京都の露地を手本に設えられた庭である可能性が十分考えられると思う。

今後、さらに出雲流庭園の特徴を整理するとともに、他の庭園との関係性を、庭石の地質の比較等により対比することで、出雲流庭園の成り立ちなどがより一層明らかになるのではないかと思う。

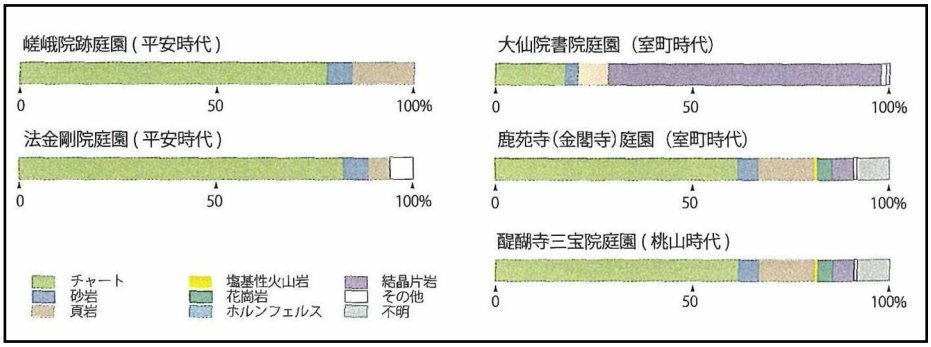

図-2. 京都の伝統的な庭園における庭石の地質構成

（出典：尼崎博正監修「日本庭園の見方」p.135）